

束芋

たばいも
アーティスト

束芋「wallpaper」2008年
©Tabaimo / Courtesy of Gallery Koyanagi

シンガポールの形容詞 @Singapore

滞 在制作のためにシンガポールへ行った。私にとつて初めての長期滞在制作となる1カ月間。不安と期待の入り交じる毎日が始まった。

シンガポールは、一時期、日本の旅行会社が力を入れてツアーを組み、「手軽な海外旅行先」と言えはシンガポール」という場所だった。現在はそれも落ち着い

ており、貿易の国らしく、多国籍企業のスーツを着たビジネスマンの姿の方が多く目に留まる。

日本の旅行会社がシンガポールを推した理由が良くわかる。海外旅行初心者にとつても、海外旅行に疲れた人にとつても安心で便利で、しかも料理はおいしい。アジアの国らしい物価や味を求めたければそういった地

がいたるのも事実。小さい国の中の生活スタイルには工夫がないと、退屈な「善良な市民」にされてしまう。私が出会った工房のスタッフは、それぞれの工夫を見せてくれ、私を退屈でない生活に参加させてくれた。

紙と版画の工房での1カ月は長そうに短かった。この工房は世界的にも特別な場所で、紙を作る行程と版画を作る行程にアーティストを参加させ、工房の技術とアーティストのアイデアが入り組んだ作品を作っている。

私は大学時代版画の基礎は学んだものの、作品制作はしたことがなく、もちろん紙を作ったこともなかった。目にするのはすべて新鮮で興味深い反面、この素晴らしい技術を使って、今まで大切にしてきたテーマや制作姿勢が本当の意味で生かされる作品作りをする自信は正直なかった。

はじめの1週間は自信のなさからか、ゆっくりと時間が過ぎていったのに、あとの3週間は

はじめの1週間よりも短く感じるくらいに速度で過ぎ去った。

アイデアの実現性をテストしていた第1週とは違い、2週目以降はやることが少しずつ明確になり、作品の出来に直接影響するかもしれない作業工程は丁寧にチャレンジしていくため、より慎重に時間を掛けて行なうことになる。多くのスタッフがアーティストしてくれても、1か月で終わらないことは、2週目が終わる時点でわかってしまった。作業は今年また継続して行なう。より良い作品作りのため、工房側は驚く程の寛大な態度でアーティストに接する。工房スタッフは今年も家族のように私を受け入れてくれるだろう。

彼らのお陰で、私にとつてシンガポールは、幸運にも退屈なくという形容詞が存在しない国になった。国を形容する言葉は必ずしもそこにいる個人を形容しないことを理解はしていたが、極端な体験を持って本当の意味で知ることとなった。

区があるし、ショッピングセンターには、いわゆる日本人が好きとされるブランドものも揃っている。街は安全だし、清潔。タクシーは安く(数年前まではもっと安かったらしいが)国が狭いため、大概、日本で言うワンメーターくらい金額で事足りる。

いい事尽くめのようなだが、国がコントロールして善を保っている状態に退屈さを感じる人